

大橋 浩 (言語学)

Epistemicity in Grammar and Discourse (文法と談話における認識性)

論文審査結果の要旨

本論文は、日常言語における文法と談話の認識性の問題を、認知言語学の枠組みで考察した理論的・実証的研究である。「認識的意味 (epistemic meaning)」は、可能性を表す概念として、従来、主に法助動詞が持つ義務・許可などの「義務的意味 (deontic meaning)」との関連で論じられている。しかし、話者による認知対象に関する判断や態度の表明としての認識性(epistemicity) は、狭義の法助動詞の意味だけでなく、多様な言語現象の意味に関わっている。本論文は、文、談話、意味変化という三つの側面から、条件文、非特定の照応、主観化・間主観化の問題に注目し、条件文、関連構文等の意味的・統語的な制約、照応に関する文法的・談話的制約、意味変化と認識性の制約を明らかにした注目すべき研究である。

本論文は、第1章「導入」、第2章「理論的背景」、第3章「文法における認識性：条件文」、第4章「談話における認識性：非特定の照応」、第5章「意味変化における認識性：主観化と間主観化」、第6章「結論」から成る。第1章では、命題や事態に対する話者の態度としての認識性が多岐にわたる言語現象を動機づけている事実を指摘し、文レベルとして条件文、談話レベルとして非特定の照応、さらに通時的現象として意味変化における主観化・間主観化の問題を考察した。第2章では、理論的背景として過去の主要な研究を参照しながら、本論文で重要な役割をになうモダリティ、ムード、認識性、確信度、主観性、間主観性の概念規定を試みた。第3章では、文レベルで認識性に動機づけられる構文として英語の条件文の特徴を検討した。予測条件文 (predictive conditionals) の特徴として、認識的法助動詞が、if P, QにおいてPとは共起しないがQとは共起可能である点について、PとQの成立に対し、中立的 (neutral, non-committing) 認識態度がとられる事実を指摘した。また、if条件文とbecause理由文との並行性と相違点を指摘し、条件節、理由節の統語的制約と意味的制約を明らかにした。第4章では、認識的態度と非特定の照応の問題について、先行研究の問題点を指摘し、その代案として、代名詞や定名詞句を含む文(S1)が表す認識的確信度は、先行詞を含む文(S2)のそれと等しいか、より高くなければならないとする意味論的制約を提示している。第5章では、通時的意味変化においても、認識性が深く関与していることを論じ、客観的意味から主観的意味、さらに間主観的意味へという方向性が見られることを論じた。その具体例として、英語のall you want/likeの構文に注目し、指示表現としての名詞句から強意副詞としての用法を発達させることを事例によって示しその変化のプロセスと動機付けを明らかにした。第6章では、それまでの議論を要約し、今後の研究への展望を論じている。

本研究は、従来の伝統的な文法研究を越える実証的な分析を試み、次の点で言語研究に大きな貢献をするものと考えられる。第1に、日常言語の認識性を反映する言語事例について、限られた作例と共時的データだけでなく、データベースに基づいて分析し、より信頼性の高い結果を導出している点である。第2に、観察データを体系的に分析するため、認知言語学の基本概念を用いて明示的に規定している点である。第3に、分析の対象とされる言語現象の諸相を、語彙レベル、句レベルの観点から分析するだけでなく、構文の意味と形式に関わる文法レベル、更に文を超えた談話レベルから包括的に分析している点である。本研究は、主に構文現象と意味現象に関する研究であるが、本研究の成果は、事態把握に関わる人間の認識のメカニズムの解明のための基礎的研究としても重要な役割を担

うものであると高く評価することができる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。